

ユニバーサルデザイン授業の組織的展開に関する研究 ～教員のUD授業に対する自己評価を対象として～

The organizational development of universal design lesson and class:
the school teacher's cognitive change in making process universal design

井上文美

Fumi INOUE

(教職大学院修了生)

平石信敏

Nobutoshi HIRAISHI

(福岡教育大学)

大竹晋吾

Shingo OTAKE

(福岡教育大学)

(平成28年9月30日受理)

キーワード：ユニバーサルデザイン，校内研修，学校組織

I. 問題の所在

1. 現代社会の要請

文部科学省が全国の小・中学校 600 校を対象に平成 24 年に実施した「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な配慮を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」において¹⁾，通常学級に特別な支援を必要とする児童生徒の割合が明示されている。

「知的発達に遅れはないものの学習面または行動面で著しい困難を示す」と担任教員が回答した児童生徒の割合は 6.5% である。こうした児童生徒のうち，「学習面または行動面のいずれかの支援が行われている児童生徒」は 55.1% で，「いずれの支援も行われていない児童生徒」は 38.6% という結果であった。

同調査では児童生徒への支援について，学校の組織的対応に関する指摘事項として，「校内委員会を効果的に機能させる」，「特別支援教育に関する校内体制を一層工夫し改善する」，「学習面または行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒を取り出して支援する」，「それらの児童生徒も含めた学級全体に対する指導をどのように行うのかを考えていく」等を挙げている。

換言するならば，通常学級に在籍する「特別な支援を要する児童生徒」に対して，学校組織全体として効果的な指導を，教員の組織体制を再編し取り組むことの必要性を述べている。

2. A 市及び研究対象校の教育課題

通常学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒に対して，市町村教育委員会レベルでも多様な教育施策を展開している。

A 市教育委員会でも多様な教育施策が展開されている。その中の学校教育の推進に向けて，①学校運営・改善の支援，②学力向上の推進，③心と体づくりの推進，④不登校児童生徒への支援，⑤きめ細やかな指導体制の確立，⑥学校施設の整備・充実等を掲げている。

⑤の「きめ細やかな指導体制の確立」の中で「コーディネーターの活用による特別支援教育の充実と課題の検証，学校体制の強化」を掲げ，学校全体での特別支援教育の充実を図るための特別支援教育コーディネーター（以下，コーディネーターを Co と示す）の活用や学校体制の強化を求めている。

このような状況を把握するために，事前調査を行った。A 市内全小学校（12 校）の教員対象アンケート調査（H26 年 7 月）では，学級内に特別に配慮を要すると通常学級担任が回答した児童の割合は，全国平均：6.5% に対して²⁾，A 市内平均：9.3%，N 小学校平均：11.0% という結果になった（図 1 参照）。

同アンケート調査結果から，A 市内教員の通常学級における特別に配慮を要すると思われる児童の割合は全国平均よりも高く，研究対象校（N 小学校）では更に高い結果となった（研究対象校：児童数 760 名，特別支援学級 2 学級を含む 26 学級の中規模校）。

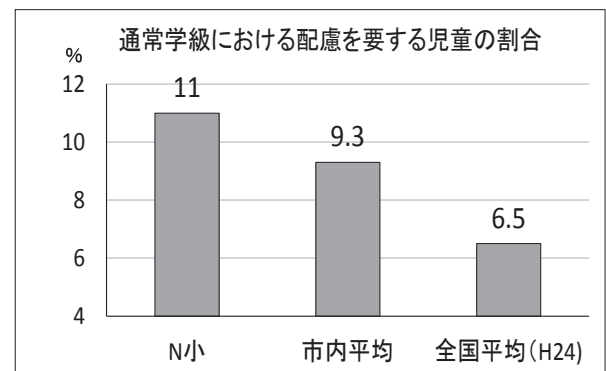


図 1 通常学級における配慮を要する児童の割合

II. 先行研究の分析と用語の定義

このような通常学級において特別な支援を必要とする児童生徒への対応として注目されているのが「ユニ

バーサルデザイン（以下 UD と示す）」型の教育方法である。

UD については、授業・学級（学習環境）・個別支援等の多様な側面の総称としての教育活動としてわが国でも導入され始めている。1985 年にアメリカノースカロライナ州立大学のロナルド・メイスが提唱した考え方であり、あらゆる人にとって使いやすいデザインを意味している。この観点の通常学校における学級・授業に取り入れたのが UD 授業の視点である。わが国でも長江・細渕（2005）、小林（2010）らの研究を通じて、UD の教育方法に着目し積極的に学校現場に取り入れた実践研究を蓄積している。

その後、UD の視点を日本の授業研究に導入した佐藤・洪澤³⁾（2010）は、UD 授業について、通常学級の授業において「LD 等の子どもには『ないと困る』支援であり、どの子どもにも『あると便利』な支援」と定義している。

廣瀬⁴⁾は、「教科の特性を踏まえ教材研究を深めた、子どもが分かる質の高い授業そのものが、UD の考え方による的確な支援や配慮もなされた授業である」と述べ、子ども一人ひとりの異なる特性や教育的ニーズへの対応などから迫る「特別支援教育」の視点とこれまでの「わかる授業づくり」のための視点を融合させることの必要性を論じている。

UD 授業の効果性は、通常学級における授業・学級活動場面において、当初は知的発達等の遅れを抱える児童生徒を対象に効果が検証されていくが、その後、小学校高学年以降の学年段階が高まっていく中で、学習進度が遅れ気味の児童生徒の効果性も検証されるようになってきている。

UD 授業の効果が検証されるようになってくると、これらを学校組織全体へと波及される取り組みが求められるようになっていく。これらを推進する教育委員会は、管轄する小中学校に対するモデル事業を展開するようになった。

東京都日野市の全公立小中学校では UD の考え方に基づくチェックリストを活用している⁵⁾。その主な内容構成は、「学級環境・授業における指導方法・個別的配慮」の 3 側面であり、これらを各学校の実践に活用することを推進している。

山形県教育センターの「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」では⁶⁾、UD の 7 つの視点として、「教室環境・学習や生活のきまり・関係づくり・授業の構成・教員の話し方、発問や指示・板書、ノートやファイル・教材教具」を挙げ、チェックリストを作成している。

大阪市教育センターの「小学校通常学級における授業のユニバーサルデザインに関する研究」では⁷⁾、様々な先行研究の分析を行い、UD 授業の基盤・要件・方法に関して 10 観点から整理している。

こうした UD 授業に関する先行研究の共通性を整理

すると、UD 授業には「教室環境づくり・学級集団づくり・授業づくり・個別的配慮」の 4 つの要素がある。UD 授業の観点については、一定のモデル指標の有用性に対して校内研修への導入プロセスの解明が求められていると言える。

本研究では、UD 授業を「子ども一人ひとりの発達特性の把握や発達特性に応じた支援方法という特別支援教育の視点と、学習における子どもたちの主体的な学びや思考の深まりをめざす教科教育法の視点が融合した、通常学級にいるすべての児童にとって『わかりやすい』授業」と定義した。

本研究では、この 4 要素に関する基準が明確であった東京都日野市と山形県教育センターの各チェックリストをもとに、UD 授業の基準を検証していきたい。先行研究をモデルとして、UD 授業の内容構成については、①基盤としての教室環境づくり、②学級集団づくり、③ユニバーサルデザイン授業づくり、④個別的配慮の 4 つの観点で構成することとした。

これらを推進していくためには、「UD 授業」を各学校の教科・学級担任が組織的に協働して取り組むためには小学校の学級担任制を前提とするならば、通常学級において担任が行う UD 授業を、校内推進体制を整えて学校組織全体で展開していくことが求められる。具体的には、全体研修会で UD 授業の具体的な観点を示す共通の行動・評価指標（スタンダード）の共有化を図り、学年会や学級への UD 授業づくり支援を行うことを通じて、UD 授業評価を行うことが求められる。

先行研究から析出されるのは、ユニバーサルデザイン型の授業の展開については、その理論的背景の導入から、学校種別の授業実践の導入の実証研究は蓄積されつつある。ただし、これらを学校全体・学校組織へと波及し、校内研修等を推進する中で多くの学校教員の授業・学級場面へと波及させていくプロセスの解明が強く求められていると考えた。

Ⅲ. 研究仮説と方法

通常学級におけるユニバーサルデザイン型の授業実践については、近年では学校種・教科を問わず実践が蓄積されてきている。

一方で、これらを学級や教科単位の実践のみではなく、学校組織として学校全体の UD 授業の実践へと拡大させるためには、どのような手法が効果的であるのかの実証的研究の蓄積が待たれていることも言うまでもない。

本研究では、UD 授業の実践を校内研修に取り入れ、学校組織全体の授業実践へと展開させたマネジメントサイクルを示した実証研究である。これらの研究の成果を踏まえて、UD 授業を学校全体に導入するための在り方を論じたい。

そこで実証的研究の方法を下記のように定めて研究

を進めた。研究対象校は A 市内の N 小学校とした。

【研究方法】

1. A 市及び N 小学校の実態調査と UD 授業の認知
2. 推進組織（UD 授業推進会議）設置とマネジメント
 - (1) 学校全体へのマネジメント
 - (2) 個別支援
 - (3) 学年会へのマネジメント
3. UD 授業の認知の変容

【研究対象校】

N 小学校：児童数 760 名，学級数 26 学級（特別支援学級 2 学級を含む）の中規模校

【調査期間】

平成 26～27 年度：校内研修計画に位置付けて実施

IV. 研究の実際

1. A 市及び N 小学校の実態調査と UD 授業の認知

- (1) A 市内全小学校における UD 授業の認知度と実施状況の調査（H26.7 月）

実施日	平成 26 年 7 月 14 日～22 日
対象校	A 市内全 12 小学校
対象者	主幹教諭，学年主任，特別支援学級担任，研究主任，特別支援教育コーディネーター，学力向上コーディネーター（合計 124 名回収）
調査の目的	A 市内全小学校における UD 授業の認知度や取組状況，課題，ニーズを把握する。
調査方法	アンケートの直接配布と回収

まず A 市内の全ての小学校に UD 授業に関するアンケート調査を行った。

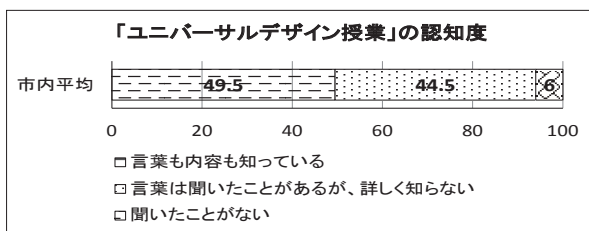


図2 ユニバーサルデザイン授業の認知度

「UD 授業」もしくは「授業の UD」という言葉も内容も知っていると答えた教員は約半数であり，言葉は聞いたことがあっても，どんな授業なのか詳しくは知らないと答えた教員と聞いたこともないと答えた教員を合わせると 50%を超えている。

つまり，A 市内の半数以上の教員は UD 授業について，どんな授業デザインのことなのか具体的なイメージを想起できない状況にあった（図2）。

(2) 「UD 授業」の基盤：「環境整備」「集団づくり」

UD 授業に関する取組状況を，UD 授業の基盤としての「環境整備」と「集団づくり」，UD 授業の実施状況に分類して分析を行った。図3に示すように，環

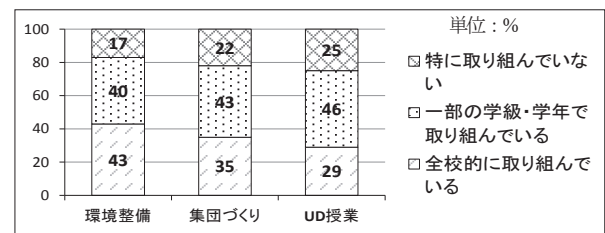


図3 A 市内全小学校の取組状況

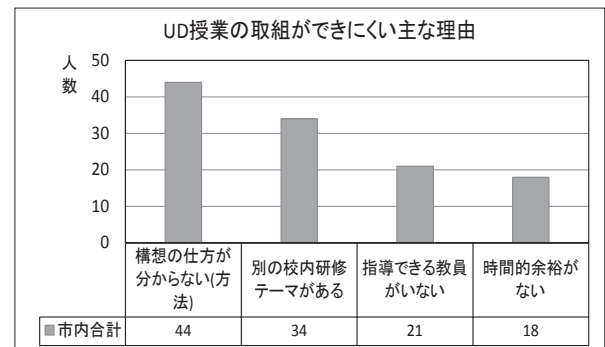


図4 UD 授業の取組ができにくい理由

境整備や集団づくりにおいては学校全体での取組が 40%前後であるのに対し，UD 授業の取組は 29%にとどまっており，学校全体での取組が進んでいない状況がうかがえる。

その一番の理由として UD 授業をどう構想したらよいかという方法の理解が進んでいないことが調査で明確になった（図4）。

このような状況を踏まえて，研究対象校である N 小学校における UD 授業の意識や実施状況の調査を，校長・教頭を除く全教員 31 名に行った。調査した内容は「UD 授業のイメージ」「UD 授業の実施状況（4～6 月）」「UD 授業について知りたいこと」の 3 項目である。

UD 授業に対する教員の認知に関しては，図5に示すように，通常学級において「どの子も分かりやすい」授業づくりをするというイメージがあることが分かった。昨年度は学級目標をシンプル化することを全校的に実施したこともあり，視覚的な工夫のイメージが強い教員が多かった。個に応じた手立てを工夫することについての意識は低い。このことから，UD 授業の具体的な工夫や配慮等を示す必要があるといえる。

「UD 授業の実施状況（4～6 月）」に関しては，図6に示すように，実施できていないと回答した教員は 68%であった。N 小学校の日常の授業展開から考えると決して何もできていない訳ではなく，日常の授業の中のどのような要素が UD 授業の視点にたった授業といえるのかがとらえられていないものと推測できる。

また，図7に示すように職務別による UD 授業の実施状況を見てみると，UD 推進委員（特別支援教育 Co と学力向上 Co）の実施率が 100%であるのに対し，

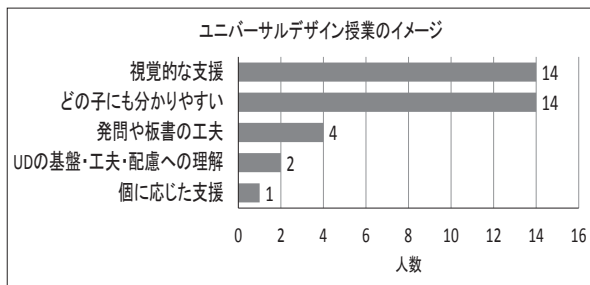


図5 N小学校のUD授業の認知イメージ

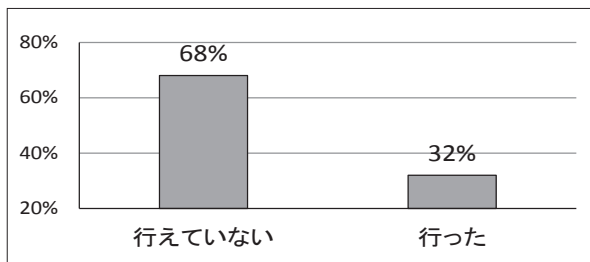


図6 UD授業の実施状況 (4～6月)

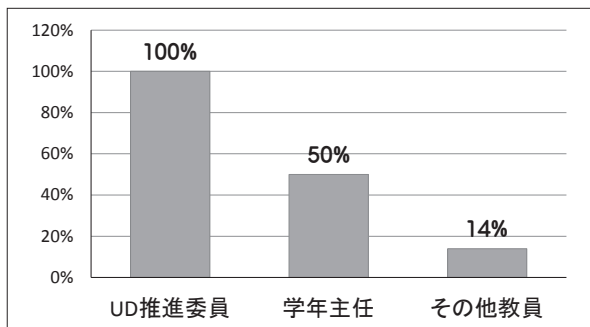


図7 職務別ユニバーサルデザインの授業の実施率

学年主任で50%，その他の教員（23名）に関しては14%という結果であり，その多くは若年層教員がしめている。このことから，UD授業の具体的な手立ての工夫や配慮について共通理解をしていく必要があるといえる。

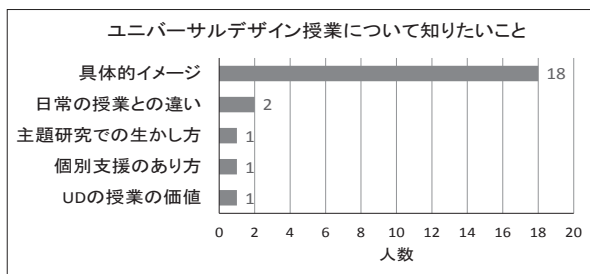


図8 UD授業について知りたいこと

「UD授業について知りたいこと」に関しては，図8に示す通り，UD授業の具体的なイメージの提供を求める回答が最も多かった。また，個別支援の在り方や日

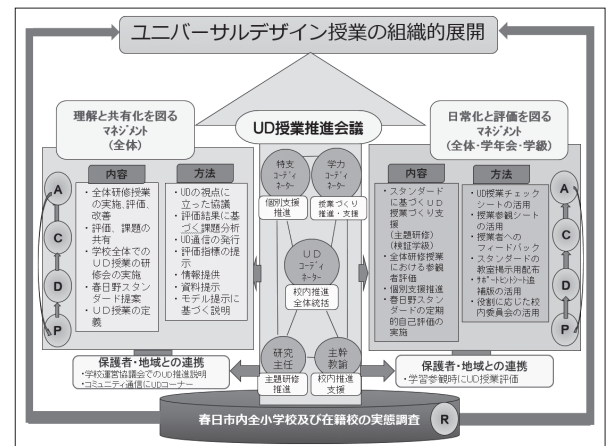


図9 UD授業推進会議を中心としたマネジメント

常の授業との違いを知りたいという回答が見られた。

調査(1)(2)の結果から，UD授業推進はA市全体の課題であり，UD授業を共有化するための行動指標や評価基準が必要であると考えた。そこで，UD授業の基盤と具体的な要素を示す「スタンダード（N小学校版）」を作成し，A市内への汎用性を持たせることを目的としている。

2. 推進組織（UD授業推進会議）設置とマネジメント

(1) UD授業推進会議の設置

まずはN小学校において，UD授業を推進する組織体を設置し（UD授業推進会議），N小学校スタンダードの活用を学校組織全体へ図っていた。UD授業推進会議のマネジメントについては，図9に示すようにUDCoによるUD授業推進会議の計画・実施・評価を中核とし，UD授業推進会議での戦略をもとに各推進委員がそれぞれの担当分掌や学年・学級に働きかけ，UD授業推進を具体化していくことである。そのために，理解と共有化を図るマネジメントと日常化と評価を図るマネジメントの2つのマネジメントを行った。

UD授業推進会議の構成員は，UDCo，主幹教諭，研究主任，特別支援教育Co，学力向上Coとした。UD授業の校内推進戦略を練り，推進委員の役割に応じた推進内容や方法を明確にする役割と担う会議体組織である。

(2) スタンダードの作成と活用

先行研究をもとにUD授業の基盤と具体的な要素を示す「N小学校スタンダード」（表2）を作成し，UD授業推進会議をもとに，学校全体や学年会・学級への理解と共有化及び日常化と評価を図るためのマネジメントを行った。

N小学校スタンダード①では，学級：教室環境・学習や生活のきまり・人間関係づくり，授業：授業の構成・教員の話し方，発問や指示・板書，ノートやファイル・教材教具授業に関する指導の観点を自己評価す

	年次	担任者 （教員） 記入日	学年 レベル	指導 内容	評価 項目	評価 結果	評価 理由	評価 コメント
I 場の概観化								
①教室内の物について、一つ一つ置く位置が決まっていますか								
②教材の場所や配置がわかるか、一目で分かるように整頓されていますか								
③席間の位置は、児童の実態に合わせたものになっていますか								
II 座席の配置								
④教室の座席の構成によってそれがそぐわないようになり配座がされていますか								
⑤教室の前・後ろの壁の掲示物は必要最小限のものに絞られていますか								
⑥教室内、教室外の掲示物と児童との関係があらわなように配慮されていますか								
⑦ちょっとした音を出す、話しかけるなどの刺激し合う音をお互いに離れるような座席配置にしていますか								
III ルールの明確化								
⑧クラス内ではルールはシンプルでもそれが実行できるものに設定されていますか （「聞くこと」「書くこと」など）								
⑨当番係などとしたクラス内での役割について、行動の時間・仕方が分かるとなった時 実案に参照できる工夫がされているのか（手帳表、マユナルなど）								
⑩担任またはクラス内の人材についての確認、評価を適切なタイミングで行っていますか								
IV 児童の様子								
⑪児童の様子、児童同士の間柄の把握に心がけ、観察・記録をとって、指導に生かしていますか （アセス、よいアンケートなど）								
⑫児童同士が争執することや打ちのことでいじめ合える場をつつたり、話し合える工 夫をしていますか								
⑬時・場・相手などに応じたコミュニケーションの仕方やマナーについて指導していますか （あいさつ、返事、お礼など）								
⑭児童のトラブルや問題について、本人又は保護者と相談を通し、その望ましい在り方を 指導していますか								
V 授業の構成（シナリオ・シート・フィードバック）								
⑮単元学習のねらい、学習の流れを提示し、児童が見出しをもち学習に取り組めるように していますか								
⑯教科書、ノートやファイル、学習用品の準備について指導していますか								
⑰導入の段階で、本時の課題につなげる工夫をしている（時間の管理、動機付けなど） わかりやすい主体的に取り組めるような課題の設定を行い、自己解決のための思考の手がかり を持たせていますか（シンバル）								
⑱展開の段階で、単元と本時の学習活動とそれに付随する学習活動のパラスタや軽装を意識し て進めていますか（シンバル）								
⑲「あやうき、クルーパ」など、何れにも応じて様々な学習の形態を生かしていますか（97） ⑳終業の段階で、「よかった。できた」という満足感、達成感を実感できるための活動を 工夫していますか（フィードバック）								
VI 児童生活への関与の指示								
㉑児童生活の規範を定め、肯定的な環境で築かれていますか								
㉒全体的・精神的・指示と習慣的の両方から積極的な支援助の工夫を工夫していますか （立つ位置、タイミング、前置きなど）								
㉓児童室に貼る規範的指示するように工夫していますか（簡潔・具体的な言葉）（シンバル）								
㉔教室の後ろの児童からも見えるような大きな文字の大きな、行間も大きい（ビジュアル） ⑵大事なことだから分かるように工夫して示しています（ビジュアル） （チョークの色、ラインや囲み、矢印や記号の活用など）								
㉕児童の理解し、書き取りしやすいような視覚的な方法を工夫していますか （カード、タスキ、図など）								
㉖授業の流れや内容がわかるような順番を準備していますか（ビジュアル）								
㉗ノートの取り方やファイルの活用の方法を指導していますか								
VII 教材・教具								
㉘教材板、写真、録画、ICT、視聴覚機器などを利用し、視覚的に指導していますか								
㉙ワークシートや練習プリントは、読み取りやすさをよりよく示していますか								
㉚児童の実態に合わせて、対応できるように教材を準備している（基礎や応用、発展など）								
Ⅷ 学習のつまずき								
①教科指導について習得されている学年レベルやミスの仕方について把握する工夫がされ ていますか								
②つまずきが起き始めていることに気づいて学習できる機会を用意していますか								
③学級以外の指導の例（通達教室など）を利用している場合、情報・教師の共有がされて いますか								
Ⅸ 社会的つきつき								
④その学びに参加できる集団づくりをしていますか								
⑤集団に参加できない個人に応じたスキル（例：言葉のかけ方、あいづつの仕方など）を 個別に教える機会をつくっていますか								
⑥小集団指導の参加機会について検討していますか（例：こぼしの教室）								
Ⅹ 活動のつまずき								
⑦集中の持続した時間ばかりではない時に、どうするかなどの具体的な行動の仕方を行う と本人と約束していますか								
⑧授業内容を聞けばいいだけでなく、具体的な活動を取り入れていますか								
N 言葉のつまずき								
⑨言葉、語彙などの字について指示内容が理解できているか確認していますか								
⑩特定の単語に字に対して、簡単な説明を加えるように示していますか								
⑪言葉遣いや表現で聴取できないときには、絵や図なども使って補っていますか								
⑫説明するこの苦手な子に対して、時々時間をかけてゆっくり聞いてあげることをはかる ようにしていますか								
V 運動のつまずき								
⑬手先の不器用さ、運動の苦手さから学習参加の拒否などが起こるように気をつけていま すか								
Ⅺ 情緒のつまずき								
⑭1日の中でめらめらする場面づくりにしていますか								
⑮得意なことや興味できる活動を時々入れ入れますか								
⑯本人の成長しているところに、時々大人になる機会をつくっていますか								
⑰自分で決めていくことなどについて、徐々に責任を負わせるように示していますか								
⑱学校生活になじむことと一緒に一緒に上り、模範として示していますか								

平成27年度は2年次であるが、UD授業推進を校内研修と関連させることとし、新たに主幹教諭と研究主任をUD授業推進会議の構成員に位置づけた。



⑥「N 小学校スタンダード」1 回目自己評価

全体研修会では、まずA市及びN小学校の実態調査結果を報告し課題を共有した。N小学校におけるUD授業の定義を、特別支援教育の視点と教科教育法の視点の両軸が重要であることに重点を置いて説明を行った。

その上で、UD授業づくりの具体的な観点を示す「N小学校スタンダード（東京都日野市、山形県教育センターの各スタンダードをもとに再編）」（表2）を提案した。

「N小学校スタンダード」は、UD授業の基盤である教室環境づくり・学級集団づくり・授業づくりの3観点からなる「スタンダード①」と個別の支援に関する「スタンダード②」から構成したものである。この「N小学校スタンダード」と結びつけてUD授業の具体的な要素を分かりやすく示すために、UDCoが実際に行った国語の授業資料等を提示しながら説明した。

(3) UD通信の発行

UD授業の校内推進状況を全教員で共有するため、平均月1回のUD通信を発行した。その内容は、UD授業推進会議での協議内容や、全体研修会の報告、学年での推進状況、検証学級のUD授業づくり支援紹介などである。通信の発行により、全教員が学校全体でのUD授業推進の状況を把握したり、他学級の取組を共有したりすることができた。

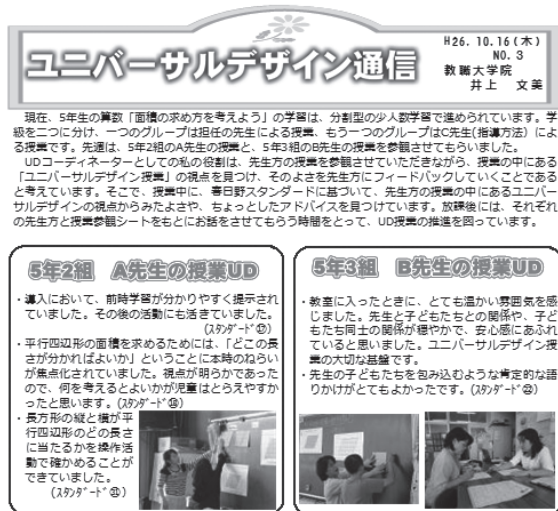


図12 UD通信 一部抜粋 (H26.10)

4. 学校全体へのマネジメント：N小学校スタンダードの視点を位置づけた全体研修

(1) 授業の実施 (H27年度3回)

2年次は校内研修で行う全研究授業にN小学校スタンダードのUD授業づくり視点を位置づけた。6～7月に3回の全体研修授業（表3）を実施し、表3に示すUDCoによるマネジメントを行った。

3回の全体研修授業を終えた教員の事後アンケート

表3 全体研修授業の日程と内容

6月16日	主題研修提案授業（4年：国語）
6月30日	指導方法工夫改善研究授業 （3年：算数 習熟度別学習）
7月14日	外国語活動研究授業（6年）

表4 研究主任とUDCo連携マネジメント

- ・指導案と分析シートにN小学校スタンダードの視点明記依頼
- ・全研でのUD授業推進委員の役割分担の明確化
- ・協議会のもち方（内容と形態）の原案作成と検討
- ・UD授業づくりチェックシート（N小学校スタンダード「授業づくり」項目）での教員相互評価の実施

表5 3回の全体研修授業後のアンケート結果

- ① UD授業づくりチェックシートを活用したことで、UDの視点から授業を参観することができましたか？
3.52（4件法）
- 【主な理由】
- ・チェックシートがあることでUDを意識して見ることができる。
 - ・チェックシートを活用することで分析表や指導案にあげられている項目以外も見ることができる。
 - ・回を重ねるごとにチェックシートの内容が意識できるようになってきて、授業を見る視点がUDまで広がってきた。
- ② ワークショップ形式で授業のよさや課題を整理したことで、UDの視点から考えを深めることができましたか？
3.50（4件法）
- 【主な理由】
- ・UDの視点から振り返ることができるので、少しずつ分かるようになってきた。
 - ・少人数での話し合いで、自分が気付いていないUDの視点に気付くことができた。

結果は表5の通りである。

アンケート結果（表5）から分かるように、指導案にN小学校スタンダードのUDの視点を明記し、チェックシートで教員相互評価を行ったことで、UDの視点への理解と授業を見取る力が深まり、UD授業の日常化につながることができた。また、協議会の内容や形態を工夫したことで、UD授業の具体的な視点が明確になり、日常化に向けた意識付けを図ることができた。

(2) UD授業全体研修会の実施（第2回・H27年7月）

UD授業推進委員が企画・運営を行い、各担当ごとに説明を行った。UDCoは4～7月のN小学校スタンダードの教員自己評価結果や保護者評価の結果を説明した。学力Coは学年でのUD授業推進の在り方やUDフォルダ活用を提案し、特別支援教育Coはサポートヒントシート追補版の活用の仕方を説明した。研修会後の教員の事後アンケート結果は図13の通りである。

4段階評価で行っているが、UD授業全体研修会についても時系列が進むにつれて、教員個々のUD授業に対する理解は高い評価結果となっている。

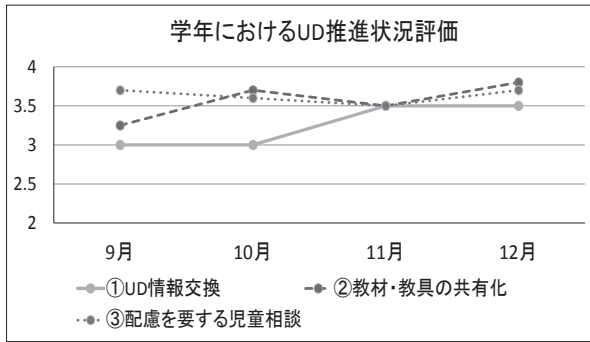


図 13 第 2 回 UD 授業全体研修会後アンケート結果

VI. 成果と課題

日本の学校教育において、通常学級での配慮の必要な児童生徒のためのカリキュラムや学習環境などを改善していく方策として注目されたユニバーサルデザイン型の授業、ガイドラインといった手法は、着実に教員の認知を高めている。しかし、一方で UD に関する理論的な知識、実践的な授業能力については、十分な校内研修機会の在り方などは議論が必要である。

平成 26 年～27 年に行った本研究では、約 2 年間にわたって教員の UD 授業に対する認知の変容を自己評価してもらっている (図 15)。UD 授業については、

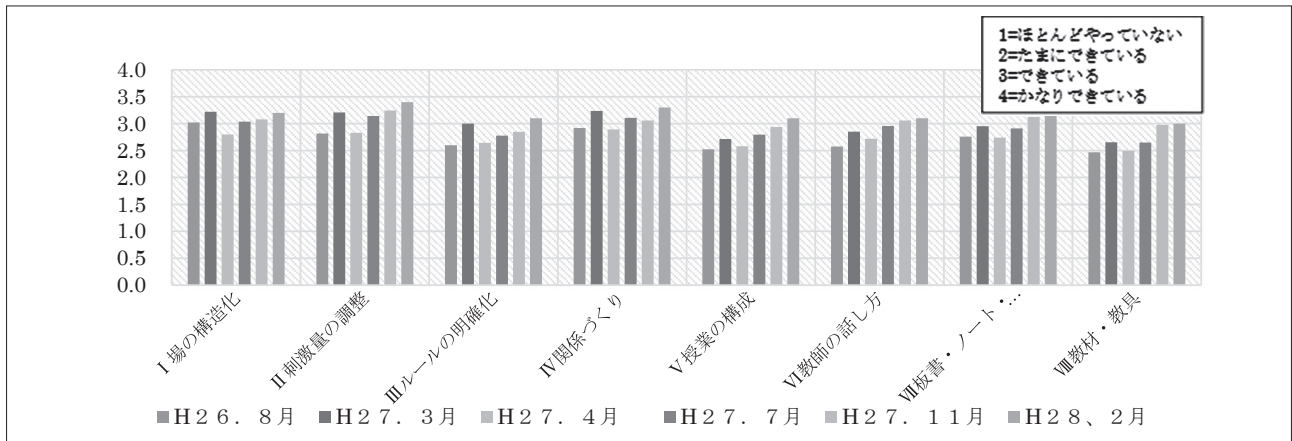


図 14 N 小学校スタンダード①教員自己評価

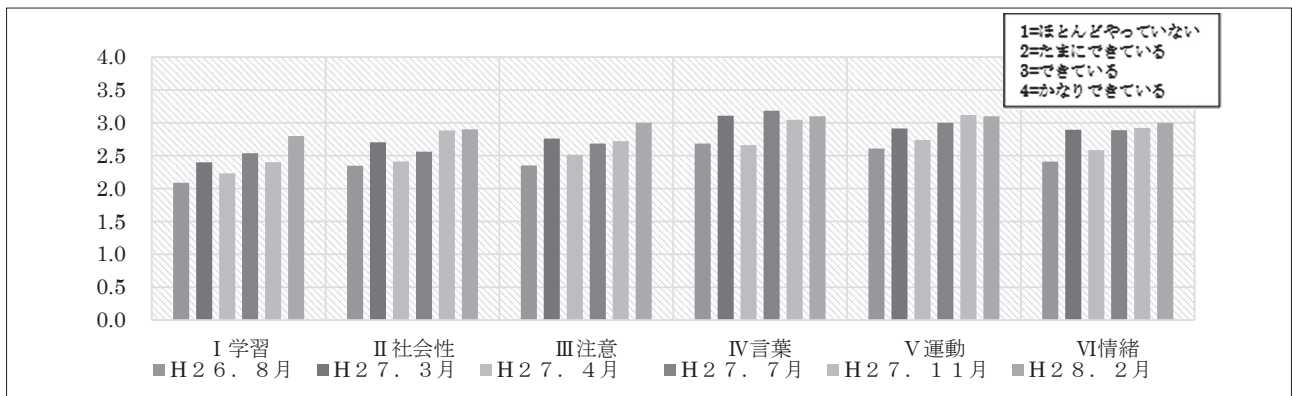


図 15 N 小学校スタンダード② (個別の配慮)

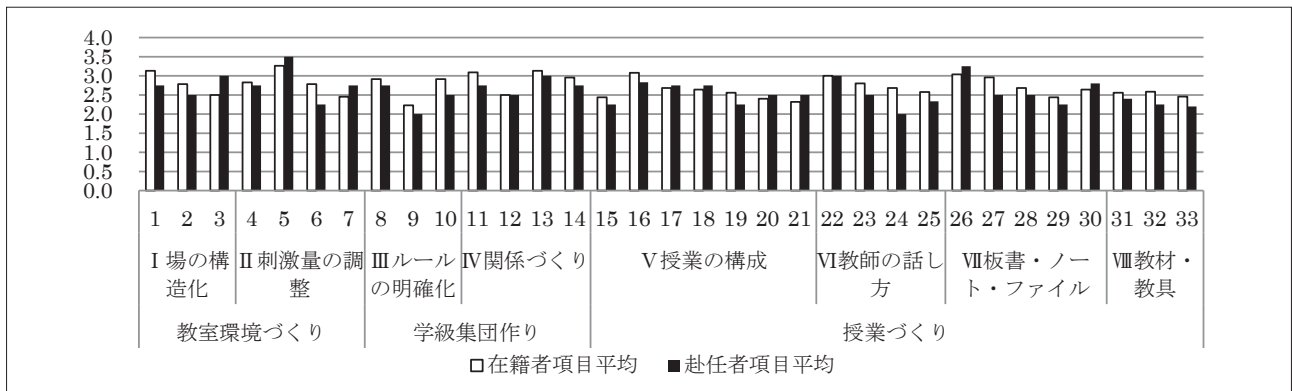


図 16 N 小学校スタンダード教員自己評価 (H27, 4月) 赴任者と在籍者の比較

学習環境、学び方・規律、板書、教材等については、教員全体の認知の高まりがみられる（図 14）。また、配慮を必要とする児童に対する指導方法についても、教員の認知が高まっている（図 15）。

これらを、2年間の時系列的なデータとして、平成 26 年度以前から N 小学校に勤務している教員と、平成 27 年度以降に赴任してきた教員を比較してみた。結果としては、UD 授業に対する認知の差が出てきている。これらは、恒常的に UD 授業に対する認知を校内研修で高めていくことが重要であることを示唆している。

換言すれば、UD 授業の導入プロセスでは、授業研究の手法として教員共通の指導法を論じながら、併せて個別な配慮を必要とする児童への対応方法を一定のレベルで共通実践を図ることを通じて、UD 授業に対する教員全体の共通認知を高めていくことは十分に可能である。

しかし、このことは新たな課題を指摘している。配慮が必要な児童の個々に対応するための、専門的な知識・技術を獲得することが、集団対応の観点から UD 授業を捉えてしまうために、課題として認識されにくくなってしまう可能性がある。配慮を必要とする児童に対して、教員に求められる個別指導の能力を獲得するためには新たな研修機会を設けなければならない。このような機会を各学校単位で保証することは、難しい現実があるのではないだろうか。

学校組織全体の UD 授業導入に対して、課題を克服する新たな取り組みについて、今後とも検証を重ねていきたい。

引用文献

- 1) 文部科学省 2012 通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な配慮を必要とする児童生徒に関する全国実態調査 p3.
- 2) 文部科学省 2012 前掲 p3.
- 3) 佐藤慎二・洪澤恭子 2010 通常学級の授業ユニバーサルデザイン 日本文化科学社
- 4) 廣瀬由美子 2011 通常の学級における授業のユニバーサルデザイン 特別支援教育研究 652 pp.21-24
- 5) 日野市公立小中学校全教員・教育委員会 2010 通常学級での特別支援教育のスタンダード 東京書籍
- 6) 山形県教育センター 2013 ユニバーサルデザイ

ンの視点を取り入れた授業づくり

- 7) 大阪市教育センター 2013 小学校通常学級における授業のユニバーサルデザインに関する研究

参考文献

- 福岡県教育センター編 2014 学校経営 15 の方策 ぎょうせい
- 福岡県教育センター 2015 通常の学級におけるユニバーサルデザインの視点を生かした授業づくり
- 桂 聖 2010 授業のユニバーサルデザイン～全員が楽しく『わかる・できる』国語の授業づくり Vol. 1 東洋館出版社
- 京都府総合教育センター 2012 ユニバーサルデザイン授業
- 小林 浩子 2010 特別支援教育 中学校の通常学級における授業のユニバーサルデザイン化の有効性について－セルフマネージメントツールの活用を通して 教育実践研究 教育実践研究 20 号 pp.247-252.
- 上越教育大学学校教育実践研究センター
- 長江清和・細渕富夫 2005 小学校における授業のユニバーサルデザインの構想～知的障害児の発達を促すインクルーシブ教育の実現に向けて～ 埼玉大学紀要教育学部 54 巻 1 号 pp155-165.
- ロナルド・メイス他 1997 ユニバーサルデザインの 7 原則 ノースカロライナ州立大ユニバーサルデザインセンター
- 埼玉県立総合教育センター 2012 小・中・高等学校及び特別支援学校におけるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践に関する調査研究
- CAST (2011) Universal Design for Learning Guidelines version 2.0. Wakefield, MA: Author. パーソズ亀山静子・金子晴恵（訳）、学びのユニバーサルデザイン・ガイドライン ver.2.0 翻訳版
- 川上綾子、石橋恵美、江川克弘、益子典文 2015 「学びのユニバーサルデザイン」の枠組みを援用した授業設計とその効果 鳴門教育大学学校教育研究 紀要 第 29 号 pp.151-159.
- 山元薫 2016 特別支援教育における授業のユニバーサルデザイン化の意義 静岡大学教育学部研究報告・教科教育学篇. 47, p. 67-76.
- 京極澄子 ユニバーサルデザイン化された授業の実践 明星大学発達支援研究センター紀要 MIS-SION March/2016 No. 1 pp.53-69.